

全国大会出場者座談会



今年度本校生徒3名が全国大会に出場の快挙を成し遂げました。右から3年生の有田君がタイピングで、1年生今井君がスポーツクライミングで、最後に3年生西川さんがスキーでそれぞれ活躍しました。

生徒会企画で校長先生との座談会を1月12日に開催しました。なお、新型コロナウイルス感染防止のためマスク着用並びにパーティション設置など感染対策を行っております。

(企画進行 生徒会主任 山田修弘)

山田(以下 山)「今回本校から三人の全国大会の出場者がタイピング、クライミング、スキーとそれぞれ種目で出ました。全国規模で活躍する3人と校長先生とご一緒に全国大会出場について語ってもらおうと座談会を企画しました。はじめに校長先生よりご挨拶をいただきます」といいます。

校長先生(以下 校)「今回みなさんはそれぞれ種目が異なりますが、全国大会に出場したということはやっぱりすごいことだと思います。今回はみなさんの経験から選手のレベルとか会場の雰囲気だったりとか、地区の大会とは雰囲気とか違うと思うので今回それを経験したみなさんの話をぜひ聞かせていただいて、他の緑丘の生徒にも知ってもらえたらと思います。今日はよろしくお願します。」

山「校長先生ありがとうございます。では早速の質問ですが皆さんが全国大会に出場した競技について詳しく説明してください。有田くんからお願します。」

有田(以下 有)「僕が出場したのは、毎日新聞社主催の毎日パソコン入力コンクールの英文部門というものに出場しました。この部門は全国大会の1か月前に発表される文章を、本番当日5分間にどれだけ打てるかという競技です。そのコンクールは年に4回あるんですけど、その6月と11月にある大会が公式大会のようなもので、その2つの合計の競技人数は約6万人程出場しています。僕の出場した英文部門は、2つの大会合わせて5千人程ぐらいの大規模な大会です。」

校「5千人のなかの4番だっけ？すごい成績だね。英文だから英語で打つんだよね？」

有「はい。英語で打ちます。」

校「有田君は英語は得意なの？」

有「いや(笑)得意ってことではないです。」

校「その英文の意味を見ているわけではないで、書いてある文字を打ってるってこと？」

有「そういうことです。」

校「ちなみにどういう基準で競い合うの？例えば1分間に何文字打てるかを競うの？」

有「僕が出た大会は5分間にどれだけ打てるかを競います。今回の本番では2201文字まで行きました。1分で450文字くらいかなと。」

校「1分で450文字と言うことは、さらに60で割ると…」

有「1秒に6文字になります。」

山「商業の検定で日本語の文章で方なんですけれども、1級の基準が710文字です。彼は英語なんでアルファベットの文字数とは違うのですが、日本語の検定基準と比べると遥かに超えています。」

校「(日本語が)10分で710文字でしょ？今の話だと5分で2200文字って言ったよね？もしあなたが10分打つたら4400文字打てるってことでしょ？」

有「でも英語と日本語はちよっと違うんです。」

校「あっ、(漢字)変換がないか。」

山「変換しないからまた違うんですよ。」

有「多分5分で2201文字を山田先生がおっしゃった日本



阿部孝広校長先生

語で変換をするとしても、10分で2200文字打てると思います。」

校「それじゃあやっぱり凄いな。1級の700文字は遥かに超えてるんだね？」

山「私が大体10分で日本語文章を1000文字程度打てますから、私の倍以上はできるかと。」

校「ああそういうこと？」

山「もちろんただ闇雲に打つわけじゃなくて正確性も問われるので。」

校「あっ、ミスがあると点数引かれるの？」

有「ミスがゼロだと、その打った文字数の20%点数が加算されます。1ミスで15%増し、2ミスで10%増し、3ミスが5%増しでこれ以上の加点はありません。あとミスを9文字以上すると失格になります。」

校「厳しいね。もう想像ができない。先生なんかは指で見ながらキー打ってるから(笑)」

有「はい。そうです。」

山「じゃあ続いてじゃ今井君行きましょうか？あなたが出場した種目について説明してください。」

今井(以下 今)「はい。僕が出たのはスポーツクライミングというめっちゃくちゃ最近の種目なんですけど、まあシンボルに言えば壁を登るスポーツです。主に三つあってスピードとボルダリングとリードっていう競技があって、僕はそのリードって言う15メートルの壁をロープ1本で登って行けるかというのを競う競技です。」

山「ボルダリングぐらいしかちよっとわからないけれども、やっぱりその競技は指先がものを言うの？それとも腕力全てで使うのかな？」

今「やっぱり全身使いますね。指の力も大切ですけどやっぱり指だけが支えられない物もあるんで全身使います。」

有「かっこいい」



3年生 有田智哉君
タイピング英文の部の
全国大会に出場す
る。コンピュータ部所属。

今「いやー(笑)」
有「なんか引けるって言ってたんですけど、クリップ？」
今「そうですね。基本的に上るのは石みたいな突起物がつけられてそれを登るんですけど、クリップかけないと落ちちゃうんで大事ですね。」
校「クリップっていうのは安全装置のこと？」
今「はい。あのカチャって引つ掛けるものです。」
全員「なるほど」
山「じゃあ次に西川さんに聞いていきましようか。出場した種目について教えてください。」
西川(以下 西)「はい。私はスキー競技の中にも色々あって、ノルディックとかジャンプとかアルペンスキーっていうのがあります。その中のアルペンスキーで、スタートからゴールまでの間に赤と青の旗門が立っててその旗門を全て通りながらタイムを競う競技です。タイムって言うてもたった1秒でも勝負が付く世界なので、いかにどのように速く滑るかという競技です。」
今「速さってそれぐらいなんですか？」
西「コースによるけど、この間のコースでは旗門が16, 7本位あってその一本降りるのにどれくらいか？」
山「スピードっていうか時速何キロぐらい出てるもんなの？」
西「結構速いですよ。ワールドカップ選手は時速100kmとか普通に高速道路並みの速さで滑れます。」
校「標高差はどれぐらいあるの？」
西「会場によってバラバラなんですけど、今回はわからないんですが去年のインターハイの場所が戸狩スキー場で長野県の飯山市であったんですけど、その一番急な斜度が40度ぐらいでした。」
校「40度か。直角三角形で見ると大したことないと思うじゃん？でも山でスキーで40度っていつたらほぼ直角だよ。はつきり言って真下にしか見えないよ。山で40度って言ったら。」
有 今「へえ」

校「コースなんてあれば雪じゃないもんね？感覚的にはもはや氷だもんね？」
西「はい。氷でした。」
有「雪の上をヒューって滑るんじゃないんですか？」
西「スキー板の角が鉄になってるんだけど、その鉄を刃物みたいにして凍っているところを切って滑るんです。」
校「カッターナイフぐらいのとがったみたいなやつで、氷のところをギリギリ滑らないようにして立ててるんだよね？」
西「はい」
校「だからすごい脚力があるんだよね？足で氷っていう雪を抑えながらスキーの角っこ使ってギリギリを回らないとズルって行っちゃうんだよ。だから転ばないで行くだけでも普通の人は大変だろうけど？」
山「多分大変だと思えますよ。昨年高体連の手伝いで会場に行ってますけど、あのコースをまともに滑ろうと思ったら：校「絶対にできない。ところでクライミングのことで聞きそびれたんだけど、あれは指で登っていくコースをどうやって選ぶかっていうのも作戦とかあるの？」
今「コースは決められていて行くって決まってるってこと？」
校「じゃあその次はこいつで行くって決まってるってこと？」
今「そういうことなんです。」
校「そうなんだ？(今井君が出た時の)Youtube 見たときに選手によって違うところをつかんでいるような気がしたんだけど。」
今「得意不得意とかあったり選手が慌ててたりしてることもあるけど、まあ知らないですが基本は変わらないですね。」
校「じゃあみんな同じところを左手でつかんで次に右手でこちをつかんでってのを大体みんな一緒のところをつかむってこと？」
今「大体一緒のところですよ。」
校「それならあとはスピードだけなんだ競うところは？」
今「いや、高さですね競うところは。」
校「あつ、どこまで登って上がれるかってことが競うポイントなんだ？」
今「そうです。」
校「最後凄いいね？ほとんど天井みたいになってるところを登ってたもんね？」
今「あれは130度くらいですね。」
校「さっきのスキーの40度もすごいけど、こつちも角度がついているところを登っていくんだもんね？それを指だけというか手とか足の力だけで登っていくんだ？」
今「そうですね。」
校「最初こつちへ行ってこつちへ行くって作戦を立てるもんだと思ってるんだけど、そうではないんだね？」
今「そうですね。」
校「ひとつ勉強になりました。」
山「ちなみに角度の話がたかさんでしたが、校長先生は数学の専門の先生ですかね。」
選手「はは(笑)」
山「では次の質問に行きたいと思いますが、全国大会に出場



1年生 今井遙音君
スボ一ツクライミング
全国大会に出場。も多数
本校入学前から出場経験有。

する基準つまりどうやってたら全国大会に行けるのかというのを教えてください。有田君お願いします。」
有「先ほども言ったのですが、この毎日パソコン入力コンクールは年に4回開かれて、その6月と11月が公式大会になっていて、その大会のどちらか上位3名に入れば全国大会の出場権を得られるっていう感じですよ。僕はその6月大会の英文で3位に入って出場権を得ました。」
今「本戦って大体人数どれくらいなんですか？」
有「全国大会は6人です。」
校「全国大会6人しか行けないってこと？」
有「他の種目と違って愛知県で予選があって東海大会行って全国という流れではなく、全国で色んな人がやってその上位6名が全国大会に出場するって感じですよ。」
校「全国で予選やって、その中の上位6名でもう一回競うってこと大会なんだ？」
有「はい。そうです。」
山「タイピングの場合ですとやっぱりオンラインで最終的に結果が集まるもんですから全国での予選が一気に開催しやすいかと。」
校「どこかの場所に集まらなくてもいいんだ？」
有「2年前までは全国大会は東京の会場で開催されてたんですけど、コロナでオンライン開催になって今年が二年目ですね。」
校「あー、そういうことか。」
有「東京行きたかったんですけど。」
山「それは残念でしたね？では次に今井君お願いします。」
今「僕は愛知県で上位に数名入賞の人が出るんですけど、前回の大会つまり去年の全国大会で準決勝以上に残った人はシードで本戦に出れます。」
校「今井君は県の大会を出たの？」
今「僕は初めてなので。」
校「あつそっかあ、1年生だから初めてだもんね？それで県で1位だったけ？」



3年生 西川朱音さん
アルペンスキー全国大会
に出場。生徒会活動が、3年生の間、生活大会に出場した。

今「県で1位になりました。」
校「東海大会はあるの。」
今「東海大会はないのですが競技人数が少ないので（東海地区）合同で予選を行いました。」
校「選考は県単位で行っているってことだね？そこであな
たは愛知県で1番だったんだ？」
今「はい。そうですね。」
校「それはすごいなあ。」
山「では次西川さんお願いします。」
西「愛知県予選では女子9人の出場枠があるのですが、自分
は今回5位になったので出場できることになりました。」
山「インターハイはどれぐらい去年出場者いたのですか？」
西「全国合わせて136名くらいです。」
山「ちなみに今井君のクライミングはどれくらい出場者いた
の？」
今「80人と少しですね。」
山「なるほど。やっぱり競技によってそれぞれ人数はまちま
ちなんですね？そう考えるとタイピング場合は県大会がな
い分ちょっと基準が違うとか？」
有「オンライン大会なので参加しやすいってこともあって予
選の人数は多いですね。」
校「元々6万人参加してるって言ってたもんね？」
有「全部合わせるとそんな人数になります。」
校「なるほど。」
山「では次の質問に行きたいと思います。全国出場に向けた
や練習や努力したことをそれぞれ教えてください。まず有田
君。」
有「今回の全国大会への他の出場者5人は、中学生からその
大会に参加してる人や高校1年生からやってる人もいます
が、僕自身その大会を知って初めて出場したのが1年前でそ
の時は経験がそもそも浅かったりみんなより入力速度も遅
かったんで、まずは毎日練習するっていうのを心に決めてし
ました。打っていくうちに自分の苦手な単語が出てくるん

ですけど、その苦手な単語を克服するまで打ちまくってどん
どん苦手な単語をなくす練習をしました。後はもうひたすら打
って慣れるっていうことをしました。」
今「大体1日何時間ぐらい練習してたのですか？」
有「ずっと集中すると目開きっぱなし結構疲れちゃうんで休
憩時間が入るんですが、多分1日1、2時間はやってました。
しかも1日に打った打鍵数を毎日記録してたんですけど、1
0月20日ぐらいから集計し始めてその時は1日6千から
1万ぐらいしか打ってなかったんですけど、全国大会の1
週間前は本当に3、4万とかになって。なので4時間とか
ずっとやってました。」
山「なるほど。次に今井君。」
今「普段の練習は大体週5、6日で土日はどちらか絶対遠征
に行きますね。練習できる場所が少ないので県外とかもしよ
っちゅう行ったりして、多いときは1日6時間ぐらい手がボ
ロボロになるまで練習します。意識したこととかは考えるこ
とです。」
山「考えるって何を？」
今「身体の位置とか気を付けないとすぐ落ちちゃったりす
るんです。そういうのは意識ひとつで変わるんで考えられるこ
とと考えて自分を客観的に見たりとかそういう技術面だけじ
ゃなくて意識してるんですよ。」
校「ひとつ聞いていい？それはただ単に腕力とか指の力が強
いんだもんじゃなくて、今自分がどういうバランスを取って
いるかどういいう風になってるかっていうのを意識するって
こと？」
今「そうですね。例えば突起物から突起物に飛ぶってなった
ときに、腕で引いただけじゃ取れないんですよ。だから重心
が下がってるかとか全部一回考えて、何が足りてないかっ
ていうの考えてでそれを実行して修正しての繰り返しです。」
校「上手になってくると、感覚的じゃなくて論理的に攻めて
いくわけだ？」
今「そうですね。やっぱり自分の考えてやってることを具現
化するっていうか形にするというか、自分の言葉にして何か
足りないじゃないかっていうのをしっかし考えてあげたり
します。」
校「それはなに？自分でやってるのをビデオを撮ったりした
りして客観的に見るわけ？」
今「それもしますね。」
校「やっぱり上の方に行くってなると考えとかもすごいねえ。」
山「それでは次に西川さんお願いします。」
西「私の場合ウインタースポーツで夏とかには滑れないので
短い期間のうちにどのようにしたら、自分の駄目なところ
をどう変えられるかコーチとか話し合ったり動画撮ってもら
ってどこが悪いかって見たりして改善していきます。あと他
にはその練習ができない分学校終わってからすぐナイター
に滑りに行ったりします。冬休みはもうずっと雪山の方に行
って早朝からもうリフト止まるまで練習しました。」
山「西川さんはこれまで生徒会をずっとやっていてさらにス
キーもやってというマルチに活動していましたがその両立



山田修弘
本校生徒会部長。担任。本校企画進行を担当。

する秘訣とかないかありますか？」
西「秘訣はまあいろんな人と接して生徒会その他のメンバーに
最初に私はこういうことで頑張っているから自分ができる
い時にはただ仲間をお願いするけど、自分がいる時には自分
ができることを全てやりつくすからお互いねって話して協
力が合ってるってやっていったかかって思っています。」
山「両立は大変だと思うけれどもよく頑張ったなって生徒会
の担当としては思っております。」
有「じゃあ次の質問に行きたいと思います。次は全国大会に出場
してみた感想を教えてください。まずは有田君。」
有「さっきも言ったんですけど元々はその東京で開催される
予定だったんですけどそれがオンライン開催になってちよっ
と悲しいなっていうのがありました。全国大会なので日本の
高校生の自分と同等その上の方の人たちが集まる場なので、
まずその同じ土俵で戦えたことがやっぱり嬉しいで
すしなおかつ自分の自己ベストを更新して4位という結果
で終わったので、もう自分の中では十分な結果だけで終われ
て良かったなと思います。」
山「全国で4位ってすごい結果ですね。同じ部門参加者が5
千人でそこで全国4位っていうすごい快挙を成し遂げた
私は思っています。次今井君お願いします。」
今「僕はコンピュータのように人数多い競技じゃないので、
結構昔から全国規模の大会は出てたんですけどやっぱりあん
まり（結果が）これと言って：やっぱり悔しかったです。」
山「今回の自分の順位が？」
今「もうちよっといけたって言うのが自分の中であつたんで
すね。最近コロナで大会減ったんで久々の大会めっちゃ
楽しかったです。」
山「中学時代も全国規模の大会には出てたのですか？」
今「公式大会もそうでないもののあつたりとかしてたくさん
出ました。」
校「そういうことか。もう常連なんだ？全国に行けばお互い
の選手のことわかるぐらいの間柄なんだ？」

今「まあそうですね。」
 校「なるほど。今回この座談会で初めて全国に行って景色が変わりました！みたいな話が聞けるかと思ったけど、今井君や西川さんにとって全国大会って言っても物珍しいことではないんだ？」
 今「そうですね。でも僕の場合競技人口が少ないので。」
 校「いやいや、少ないって言ったって全国だよ。誰でも出れるってことはないし、他の子と同じようにできるってことじゃないから。そうか君たちはそのぐらいのレベルまで行っちゃってるんだ。」
 山「では今度西川さんですが、西川さんは今年のインターハイがまだ開催されていましてので去年までの大会の様子などの話をしてください。」
 西「やはり全国となると今まで出てきた大会と違って緊張感があったのですが、結構フレンドリーな選手が多かったです。色んな場面でもこの県から来たの？って話しかけてくれたりして、そこで他県の選手と仲良くなれたなと感じました。」
 山「次で最後の質問となりますが、みなさんの今後の目標をズバリ教えてください。」
 有「僕が出た全国大会も小学生から高校生までしかなく、一般は予選しかないのでそこで1位を取れる実力になりたいのがひとつと、来年から専門学生なのでアルバイトでこのタイミング能力が生かせるように役に立てたらなと思います。」
 山「今回のこの座談会の入力のアルバイトする？」
 有「いや、いいです。(笑)」
 山「じゃあ私が自分で入力します。次今井君お願いします。」
 今「僕はまだ2年あるので。今回はコロナの関係で準決勝がなかったんです。本来だったら僕は決勝が6人(しかいない)だったんで準決勝止まりなんです。だからやっぱり入賞とかできるようなりたいです。」
 山「最後に西川さんお願いします。」
 西「私はアルペンとかではなくて、基礎スキーの技術戦を頑張っていきたいなと思っています。国体予選は愛知県で1位通過に持っていきたいなと思っています。」
 校「技術戦ってSAJ(全日本スキー連盟)の級があるんだっけ？」
 西「SAJの1級で18歳以上でなければ出られないんです。」
 校「あなたはその1級を持ってるの？」
 西「はい。去年の春に1級取りました。」
 校「これはすごいねえ。」
 山「それではお時間になりましたので、最後校長先生に本日の座談会の締めのご挨拶を頂戴したいと思います。」
 校「今日先生はみんなが全国大会というステージに立ったことによって、新しく見えた景色や触れ合った同じプレーヤとかと交流したことによってこの人はすごいなあとあったとかあるいは自分もこういうところに立ってるなっていうことで改めて自分のことを見直したりと、何か皆さんあの得

たものや感じたことのお話が聞けるかなと思ってました。西川さんや今井君は二人はもう数年前すでにそれを経験して、有田君は今回初めて全国大会出場だけどもそれもおんラインだったらかなな感じるものが少なかつたのかなと思います。今後の目標のところにも触れたけど、それぞれ種目のなかで上位級や上位を目指して終わりたいけどさき有田君が言ったみたいこのことが種目だけで終わるじやなくて、みなさんの人生これから生きていく中で他のことに役に立つと思います。今までのすぐ裏で努力したことたくさんあると思いますし、そういうことは競技の順位だけではなくて他のところでもちゃんと一生懸命やたらこういう結果がでるんだとあるいは、結果には出なかったとしてもそこにかけた時間は無駄でないと思います。競技はもちろんだけど人生がちゃんと幸せにできるようにしてもらいたいと思います。今日はありがとうございました。」
 山「校長先生ありがとうございます。長時間にわたり座談会を行いました。これでお開きにしたいと思います。これからの活躍を期待します。今日はみなさんお疲れ様でした」
 一同「お疲れ様でした」

座談会を終えて

今回の座談会で3名の生徒は、校長先生とお話をする機会が大変貴重なものであったためはじめは緊張をしていた様子でした。ですが、座談会が進むにつれて各自の種目についてしっかりと話し、後半は和気あいあいとした雰囲気でした。全国大会に出場の経験や各自の努力など多くのことが話題となり、校長先生と生徒のみなさんと多くのことを語り合いました。充実した座談会になったと思います。
 有田君は全国大会という舞台が初めてとのこと、本来であれば東京にて開催されるものがコロナの影響でオンライン開催となってしまいましたが、全国の舞台という緊張感のあるなかで大会に挑んだと思います。
 西川さんと今井君は全国規模の大会出場の常連ということではありますが、西川さんの場合部活動や生徒会、ボーイスカウトにも取り組んでおり、様々な活動しながら全国大会の出場を毎年決めております。今井君も遠征など練習環境の少ないなかで本校入学以前から様々な大会に出場を果たしており、2年生3年生になっても上位を目指したいという気持ちが見え向上心を持っていてと感じました。
 これまで彼らがしてきた経験や努力は並み大抵のことではないのだなと改めてこの座談会で実感しました。
 この座談会を読んで、本校生徒の皆さんも何か挑戦してみたいかなと思います。今頑張っている部活はもちろんですが、何か自分のやりたいことを見つけて挑戦して欲しいです。全国レベルなんていうのは難しいことではありますが、これには自分があるとか誰にも負けなまいかなというものを身につけて欲しいと思います。
 本校で全国レベルの生徒が複数名いるということは誇りです。みなさんも3名の生徒と同様何事にも努力してください。



君奈さん
 保莉お
 容恵ま
 本藤高
 岡伊高
 協真
 影校年
 撮本221